

巖たり北支派遣軍

大黄河の歌

楊柳青く芽をふきて

頬にそよ吹く春の風

水の流れも緩やかに

春訪れし大黄河

万年初年兵の戦争体験記

福岡県 金子 久 男

福岡県三門郡三橋村磯島で大正十四年七月二十日出生、昭和四十（一九六五）年までここに住みました。

一歳の誕生日少し前、麻疹を病み、その高熱のため左目失明、「ヒーガラ（斜眼）」とか「メッチヨ（盲）」と笑われ、また悪口を言われて苛められました。私より年上や喧嘩の強い者が、私に対して苛めや悪口を言うことに気が付き、よし誰と喧嘩しても負けないようになれば笑い者にならずにすむと考えて、私は小身、非力でしたので、喧嘩道具を持つての喧嘩となり、怪我をする者も出る始末で、その凄さに恐れて、悪口を言う者は無くなりました。しかし三橋校開校以来の悪さ坊主になりました。

父母姉妹、家族四人が心配してくれました。父

の新一は田舎相撲の大関を務め、自称「藤間流」の名取りで、かつ田舎芝居の座長を務める美男として、磯鳥界限の有志でもありました。母スギは小柄でしたが良く働き、愛嬌も良く、近所の世話役もするほどでした。私は母親の言いつけは良く守り、手伝いも良くして両親を喜ばせておりました。

ところが昭和十三年に父親は近くの女と家出をして、私達は母と姉妹、四人で暮らすことになり家の生活は一度に変わりました。母の苦労と心配が増え、私は母を安心させるように働きました。

当時、三橋高等小学校を卒業した近所の子供たちは、全部大牟田の三井の会社に入社しましたが、私は左目が見えず、入社試験も受けられず、切歯扼腕といえますか大変に悔しかったのですが、母には「何か仕事はあるよ、心配しなくても良い」と言っ、近くの三池郡高田村江の浦の渡辺製瓦工場に、住み込み奉公に行くことになりました。こうして私は母に生活の加勢をして、母の喜ぶ姿

を楽しみに仕事に励みました。

昭和十八年三月二十三日、母が死亡しました。私の落胆は筆舌に尽くし難く、気落ちの余り病気になる、仕事も手に付かずでした。また、これを見ていた姉の心配も一通りでなく、姉さんの優しい介抱と心尽くしで私も立ち直り、再び奉公に出るようになりました。

昭和十九年十一月一日、渡辺製瓦工場に勤務中の昼休みに、姉から「貴方に召集令状がきましたよ、十五日十時までに久留米西部第四十八部隊に入隊になっています。早く家に帰って用意をしないさい」との連絡がありました。

私は欣喜雀躍、生れて初めて日本男子として認められた嬉しさに「何、俺に召集令状が他の者と同じように来た。俺を日本男児として、しかも兵隊として認めていただいたのは天皇陛下が初めてだ。一人前の男に見ていただいた。天皇陛下万岁！」と大声で叫ぶのを見て、皆びっくりしたようでした。

昭和十九年十一月十五日、無事、久留米歩兵第四十八連隊に入隊、北支派遣軍要員として第三中隊に編入されました。部隊は諸準備を整え、久留米を出発、門司港から朝鮮の釜山港に上陸、ここからは鉄道輸送で、十二月八日に山西省遼東の目的地に到着しました。

北支第一九七五部隊「固」部隊の本部は陽泉と言う炭都にありました。ここから約四十里離れたところの県庁所在地が遼東であり、東西四方を山に囲まれ、その山間を川が流れ、そこに広がる平野がまた広々としていました。

そして陽泉は石炭の露天掘りで有名な街と聞きました。列車を降りて見たら、駅の直ぐそばで石炭を掘り出し、そのまま列車に積み込まれていて、ぼた等は無い良質な石炭で、本当に驚きました。

全員下車の命令で中隊ごとに整列して駅の外に出ますと道路は雪で、車輪の跡だけ雪が解けて水が溜まり、その水が靴の上まできます。雪の上を

歩くと、その下には水があり、そんな中を宿舍まで歩きました。

宿舍に着いて、手足を伸ばして一息横になった途端、いつの間にか眠ってしまっていました。その夜、初めて外地の床に寝ることになり、翌一日は休みとなり、最初の二日間は軍人行動及び軍隊生活の基本訓練が行われました。

最初の二日間には、誰もが安心が出来るように、細かく、しかも親切に指導と訓練があり、何も知らない私には、この軍人作法や軍隊生活の基本動作を教えられたことに、本当に気を強くさせられました。

軍隊生活に自信を得た私は勇気百倍、よし俺が思っていた通り、誰にも負けずにやって行くぞと決心しました。そして我々新兵の出身地は山門郡、三池郡、八女郡の三郡からの二十二〜二十三人で、郷土の仲間作りが出来ました。

この陽泉から約五十キロの所の籍陽県に第二中隊が位置し、さらに約五十キロの所に部隊本部の

ある和順がありました。ここに第四中隊と第五中隊、通信隊が駐屯し、さらに約五十キロ先の遼東には第三中隊が配属され、第一中隊は陽泉にそのまま残ることになりました。

籍陽までは一日で行って、翌日は休み、その翌日に和順と遼東に行く者は出発、遼東行きは和順でも一日休んで行くことになり、第一中隊を残し、全員籍陽に向い出発しました。

前日の雪で道路は積雪十センチ、雪を踏み分けての行軍は全員初めての体験で、外気温度零下八度ぐらいか、昼食は飯盒に詰めて背囊に結び付け、頭布は吐く息が凍って白く、内側にハンカチを入れて寒さをしのぎました。昼食は飯が氷って、帯剣でこじつても、その帯剣が曲がる始末で、乾麺ぼうを食べ、行軍を続けました。

空腹で落伍兵が多数出ましたので、乾麺ぼうを食べるように指示が出たのですが、私は勝手な判断で先に食べ、仲間にも指示して、落伍者もなく籍陽に到着しました。

籍陽で一日休み、初日の失敗を教訓に二日目に和順に向い出発、無事到着しました。第三中隊は、一日休み、二日目に遼東に向け出発しました。

私は足が十文です。軍隊にはそんな小さい靴はなく、私は地下足袋での行軍になり、古兵や上官からは足は大丈夫かと心配を掛けましたが、私はこんなことで落伍してたまるかと行軍を続けました。

昼食前、中隊本部から迎える兵隊が三十人ほど合流しました。「皆元気を出せ。後六里で本隊本部に着くぞ、後一息だ、頑張って歩こう」と声を掛けられました。その時、一人の落伍した戦友が小馬に乗せられていましたが、手綱を手取る力が無いのかふらふらしていますので「えーい、このスカタンが、そーら走るぞ」と、十数メートル走りました。

曹長さんが「おいお前元気だが、靴は地下足袋で大丈夫か」といいます。私は「はい、地下足袋でも軍靴でも変わりません、軍靴履いても落伍す

る奴はします」と答えました。すると曹長は「そ  
うだね、地下足袋でも元気の良いのは変わらん  
あ」とにこにこ見ておられました。この方が後  
で教官になられた水町曹長でした。

遼東に着いた時はもう薄暗くなりました。出迎  
えの前田隊長の挨拶の後、次の三班に分けられま  
した。

第一班小銃班、第二班軽機班、第三班擲弾筒班  
の三班で、私は第二班の軽機班でした。

私たちの班の部屋は、初年兵二十六人と班付教  
士二人の二十八人で、古年次兵は別室での起居で  
した。訓練にも内務でも、私は常に先頭に立ち苦  
労をいとわず、班長、班付、古兵にも心を配る私  
の日常の勤務動作に、上官も戦友も可愛がってく  
れました。

一期三カ月の思い出は実弾射撃で、三回の成績  
が部隊の最高記録を作ったと褒められた時でした。

私の隊長は和田隊長で、この隊長はじめ班長に  
も可愛がりましたが、中でも川添班長のことが

あります。

この川添班長は佐賀県七山村出身の川添清兵長  
さんで、毎日班長の世話をした後の昼休みの時、  
私は古兵の部屋に行き、銃の手入れ、靴磨き等を  
済ませていました。他の同年兵が食缶洗いに行き、  
銃の手入れ等はしていないことから、川添さんが  
食事の分配前に、私に取って置いてくれるなど、  
川添さんは私を実の弟のように可愛がってくれま  
した。

やがて三カ月が過ぎ、一期の教育が終わり、初  
年兵も一人前の兵隊として実務に就くようになり  
ました。

三月末に「固」兵团と山東省にいた「桐」兵团  
の一部が合同して「至巖」兵团が編成されること  
になり、部隊は編成替えのため転属、移動が行わ  
れました。そして川添さんと私は、第一先発隊と  
して遼東と部隊本部のある和順との中間に位置す  
る「九家口分遣隊」に勤務することになりました。

この分遣隊に来て十日ほどして、川添兵長に奥

さんからの手紙が来て「おい、これを見て読んでんか、娘の写真が出来たら送ると書いてあるだろうが、そして俺に似て目玉のくるっとして、お父さんにそっくりで、次の便できっと送ります、と書いてとるから」と笑顔いっぱい私に手紙を差し出しました。

結婚後十年、やっと出来た初の子供で、出征する時は奥様のお腹の中、未だ見ぬ愛児の写真を、次の便りで送ると書いてあり、喜ぶ父親の姿がここにありました。

そのうち馬百頭、馬車五十車両に軍需品、食料等を運ぶ輸送部隊が編成されました。護衛の兵力は指揮官、兵約三十二人で川添兵長も行くことになりました。私はその輸送部隊の出発を見送り、朝食を済ませて一息ついて間も無く、突然銃声が轟きました。これでは輸送隊が攻撃されたということが即座に分かり、軽機に軽弾倉二段込め、後は弾薬手に任せ、現場に向って走り出しました。

ここは山西省籍陽県の県庁所在地で、籍陽から

六キロぐらいの地には溪谷があり、道路はこの谷底を通っており、襲撃の恐れのある危険な場所です。ここに待ち伏せしていた八路軍約二千人が二手に分かれ、稜線より一挙に襲いかかって来たのです。

私は銃声を聞いて飛び出して一時間ぐらいで現地に着いたのですが、時既に遅く、そこに残っていたのは人の死体、傷つき倒れた馬だけで、馬車も馬は取られて車だけ残っている有様でした。そして敵兵は山上におり、いかんとも出来ない状況でした。

私はそのような敵情を見ているよりも、大事な兄貴の川添兵長を見つけ出すことだ、元気でいて欲しい「川添さん！ 川添さん！」と叫びつつ河岸を捜し回りました。そして輸送隊の先頭近くに既に息は絶え、流れ落ちた血潮で真紅に染まった川添さんを抱き上げました。

その時は二十七人が戦死、三人が負傷し、二人が行方不明でした。二十七人の弔いを済ませ白木

の箱に遺骨を納めて、祭壇に飾った日、遼東に行った連絡隊が、川添さんの娘さんの写真を持って帰って来ました。私は「ただいま写真が着きました。天国から見て下さい」と言ってお供えする積もりだったので。しかし、その時出た言葉は「川添さん、仇は俺が討つ、見ていて下さい、倍にも二倍にも、何十倍にも仇討ちするまで俺を守って下さい」と心から誓い、そして念仏を唱えて帰りました。

戦争で一番恐ろしいのは、この心変わりです。仇はきつと討つと誓う、その心が後でいくら敵兵を倒しても倒しても、川添さんのあの時の死んだ姿を思い出すと、「敵討ちだ、敵国の人なら誰を殺しても」とがめぬような心境になってゆくことです。

この後、私は幾ら敵兵を軽機の餌食にしても納まらず、敵兵を捜し求める私の姿は正に鬼神のよう、藤川班長も心配して、常に自分の横に私を置くようにして苦勞をされていました。

五月中旬、中隊は編成替えがあり、私どもは治安行軍に出かけることになりました。古賀分隊の隊より早く、先に部落に進んで行った時、直ぐ後を追って来た敵兵は一斉に射撃して来ました。味方は三十人、敵はラッパ一個で約二百人で、ラッパ二個で四百人という優勢な敵が包囲する様子でした。

我々は、後方百三十メートルぐらいの土盛りの地点まで退去命令が出て、戻って大息をしていますと、中隊長が「おい金子何をしとるか、中隊一番の射撃手が、軽機を撃たぬとは何事か、早く撃たぬか」という。軽機射手の川崎兵長は私を庇うと同時に敵の動きを見ました。私はようやく氣息も納まったところ、五十人ぐらいの敵がひと固まりになって進撃して来ました。私にとって、こんな格こうな目標はなく、十発連射の軽機が火を吹きました。

「金子やったぞ！ 弾着よし、お見事！」と褒められました。それからは右手に三十人ほどの敵

兵の姿を見て五発打ち込んで三人を倒し、左側の三十人ぐらいの敵には四人ぐらいに的中させ、さらに三十メートル右手の動き出した五十人にも十発連射して七、八人が、正面に動いた七、八十人にも私の軽機が火を吹き七人ぐらいを吹き飛ばしました。この勢いに敵は戦意を無くして引き上げました。

中隊長は先に帰隊し、後は藤川班長の指揮で全員帰隊して、夜、戦死者を捜しに出ました。今日は私の軽機一丁で敵兵を惨敗させたことになり、軍隊が今まであれば勲章ものです。しかし、このような不意の襲撃を受ける恐れのあることから、これからは、治安行軍でも十分に敵の状況を把握することが大事となり、無理な治安行軍はなくなりませんでした。

大東亜戦の方は連合軍が優勢になり、中国戦線でも青島に上陸の可能性があることから、この方面にも陣地構築を行うこととなりました。そして八月十五日午後二時ごろになって、陣地構築の作

業中に「直ちに作業を中止し、営庭に集合せよ」との伝令がありました。そして「日本が無条件降伏したとのことで、本日正午に天皇陛下の玉音放送がある」との伝達でした。

全員営庭に集合すると、中隊長から無条件降伏の玉音放送の事実を知り、全員が東の空を仰ぎ見て、無言のまま、涙を流し呆然としていました。しばらくして私が「未だ我々は一度も戦争に負けではおらん」と地面を叩きながら涙声で「北支派遣軍は未だ戦う力があると本部に伝えろ、俺は一度も戦わずに無条件降伏など承知はしない。米軍青島に上陸ばして見ろ」と怒鳴りながら兵舎へ走り出しました。私の怒鳴るのを藤川班長は静まるように言ってくれまして、私の気持ちも無事に収まり、帰国を待つことになりました。

驚くことに今度は毎夜、鉄道を八路軍とその手先が壊すのです。そこで鉄道警備の連合軍より協力要請があり、第三中隊も三つの駅の間を警備するため、毎夜二個小隊が出動し、八路軍とは毎夜



小競合いが続きました。このため連合軍からは、八路軍の本拠地を討伐することが要請されました。

私は第三中隊の三人を連れて、部隊長の護衛として部隊本部に合流し、この討伐に行くことになりました。この討伐行は、二日目の午前十時半ごろより前進し、八路軍の本拠地のある部落の手前の小山で、しかも巨岩が連なる安全地帯で、本部が作戦協議の間休憩となりました。

休憩になって私の前に作戦本部長が腰を降しました。私は「作戦部長殿の作戦はここで良いが、後百メートルぐらいで山頂です。あそこを占領しておかないと大事になります」などと遠慮なく意見を具申しました。すると、本部長が「お前たち兵隊から色々指図されんでもよい、兵隊は黙って休んでおけ、いらぬ口を出さんでよい」と言います。私は「いらぬ口出しではありません、絶対あそこは占領しておかぬと戦闘は出来ないが、本部長さんが、そう言われるなら休んで置くか」と、私は小声で言いながら、横になり休憩しました。

本部会議が開かれて少したったとき、突如銃弾が雨霰のように飛んできて身動きも出来ず、集っていた将校たちは体を丸めて山上を眺めています。そして誰かが軍刀を抜き「突撃！」と叫びましたが、もう終戦後です。そう言われて動く兵隊ばかりではなく、皆横になったまま動かない。

「この山頂の敵はなかなか撃退し難し、下手すると死に行くようなものだから」と戦友の秋葉が言います。しかし「おい金子、そろそろやるか」と言うのです。私は「うん、やっぱ俺たちがやらねばならぬだろうね」と答え、秋葉も「その通り、俺たちがせぬならどうもされないだろう」と、「おう、そんならひとつ出るか」と、左端から軽機五発、右側から私が走り出て十発、さらに斜め前に走り出て連射をするなど、数回の射撃を繰り返しました。

横を見ると秋葉、戸上も銃を持っており、一緒に山上の敵兵に射撃を加えました。すると敵兵の射撃が減り、逃げ出す敵兵が見えます。こうなる

と私の射撃が激しくなり、遂に敵兵を追い払い、山上に駆け登り、逃げる敵兵に軽機の嵐を浴びせました。

部隊本部は救われ、帰りに馬上で副官に、岩陰から飛び出して前進した私を見て「あの戦い振りは大した物だ。作戦本部長に文句を言っとったが、あの軽機の射手はどこの中隊の誰か調べてくれ、昔なら勲章もんじゃない」と、終戦後の一騒ぎでした。その討伐が済んだ後は大したこともなく、ただ復員待ちで過ごし、二月五日に青島港を出発しました。そして八日に佐世保の三海港南風崎に入港して解散、翌日帰宅しました。

解散時の部隊長の挨拶には「今までお国のためと言って命を捧げていただきましたが、今国家再建の原動力は石炭です。しかし採炭夫が少なく、採炭が需要に追いつかずにいます。どうか国家再建に再度命を国に捧げる積もりで採炭夫になるようお願いします」と頼まれました。

帰宅して五日後に、大牟田の三井本社に履歴書

を持って行きましたが、丁重に履歴書を返して「本当に申し訳ございませんが、貴方左目が見えないでしょう。内の会社では眼の不自由な方は雇わない事になっています」と言います。私は「五日前までは北支で国のために命を捧げ、今度は採炭夫で命を張って頑張るぞと思ったのに。人が足りぬときは第一線部隊、余れば不具者扱いか」と無念の思いで履歴書を踏みにじり帰宅しました。それからまた片目の差別を受ける苦しい人生が始まりました。

昭和六十年の三橋町会議員に初当選してからも和田隊長の訓示を基本として「誠実、団結、明朗、これに町の平和と繁栄、町民福祉の充実と民生生活の安定」に努めてきました。その結果、町民の信頼を受け五期、最後は議長を務め、また市町村合併の功労者として自治大臣表彰を受け、平成十三（二〇〇一）年十月まで、通算二十二年間の地域行政に勤めてきました。